

1988年の本。物価指数を下げるために生鮮野菜の出荷奨励を行う話が出ており、物価の上がない現在と違う時代だったことがわかる。

A 県庁の人がこんな話をしている。

「わが県民は、年間八千億円の生産をする。しかし、使っている額は一兆三千億円。差額の五千億円はわれわれ県庁が東京へ行って補助金などを取ってくるのである。県民が幸せに暮らせるのは県庁の力である」と。

この話にウソはない。県民にとっては、県庁サマサマの有難い話に違いない。東京にいれば五千億円取られるが、A 県にいれば五千億円もらえる。どっちが得か。最近、若い人が東京に居つかなくなったのも当然である。

日本の経済を見る場合、少なくとも五つの視点が必要だ。これらは日本で起こっているドラスティックな変化でもある。

ひとつは、長男・長女が圧倒的多数を占める社会になりつつあるということ。そしてそれに関連して持ち家社会になっている点である。二つめは、ゴルフを例にとったように女性優位の社会になっている。それも中年女性が中心であるということ。三つめは、マル優制度がいろいろと言われているように貯蓄社会になっている。つまり大金持ちの社会であることが見落とせない。四つめは、以前から言っていることだが、文化を産業として捉える時代になっているという視点。そして五つめは、日本がすでに二十一世紀的な社会の建設では欧米を追い越してほとんどトップになっていることである。

統計数字はこのようにして操作される

年度末、つまり三月末日での物価を下げるために、生鮮野菜の三月末日での相場を下げようと巧妙に操作する。生鮮野菜が物価指数に対して一番影響があるからだ。具体的にどうするかといえば、まず東京都に依頼して、産地に早出し奨励金を出すことで三月末日までに間に合うように、まだ半出来の野菜を収穫してもらってどっと出荷させる。そうすると野菜がどっと増え、月末の値段がぐっと下がる。こうして本来なら六・二パーセントの上昇となるところを「何とか五パーセント台にしる」ということで五・九パーセントにする。こんなことが行われていた。

青函トンネルはなぜ価値がないのか。コストが高くて、しかも利用価値がないからである。たとえばあのトンネルのコンクリートの厚さは九〇センチもあるが、海水が浸みてくるからポンプで水を汲み上げねばならない。その費用は年間約一五億円。それに国鉄が使うとなれば、鉄建公団にリース料として年間八〇〇億円。運転すれば毎年一〇〇億円の赤字が出る。しめて九〇〇億円もの金が毎年トンネルに沈む。いまの青函連絡船は年間三五〇億円の赤字だから、国鉄としてはトンネルは受け取りたくない。何か他に使い途はないか。シイタケの栽培などと

いう話もあるが、ポンプ代の一五億円も出ない。原油の貯蔵に使ったら、というアイデアもあるが、海水が混じるからこれもダメだ。結論はやはりフタをするのがもっとも無駄が少ない、というバカげた結論となる。

北海道と本州をつなぐ足が全くないのならともかく、飛行機もあれば連絡船もある、フェリーもある。

もともと北海道経済が振るわない原因はどこにあるのかというのを、学者がいろいろ検討して「その離島性にある」と結論づけたのが、このトンネルの始まりだった。そもそもの間違いがそこにあるのに、みんなが「そうだ」と合唱し、「離島性さえ解消すれば北海道経済は一気に活性化する」となった。離島性に加えて積雪寒冷地、市場の遠隔性も振るわない理由とされた。どれも学者や官庁の結論だが、そんな客観的な条件だけが理由ではない。

積雪寒冷は確かにハンディキャップだが、しかし逆にそれがメリットになる業種もあるはずである。それに現実には、道内の国道の除雪は国費でやっている。寒冷地という理由でさまざまな補助金もある。石炭も安い。しかし、結果はどうかといえば、それでも北海道の経済は活発にならなかった。

学者や官庁は客観的な条件だけですべてを結論づけて、それで科学的だと思っている。本当の原因はもっと違うところにあったのだ。

中小企業の社長に聞けば、「北海道の人はヤル気がないからですよ」という答えが返ってくる。工業が少ないことについても、北海道の人は工業が嫌いなのでしょうと言う。所得の向上よりも、もっと他のことに強い関心を持っているのである。結局、ある結論を導き出すのに客観的条件だけで考えようとするからこのような誤りを犯してしまう。もっと人間の要素を入れて考えるべきだった。経済というのは人間の営みで非常に人間くさいものである。その点を無視して周囲の客観的条件ばかり、ああだ、こうだといってみても始まらない。

北海道ではなぜ手袋をつくらないのか

北海道の主体性について、もうひとつ例を出そう。

寒冷地の北海道では手袋は必需品だ。ところが北海道の手袋は全部、本州、それも南国である四国の香川県のメーカーが一手に引き受けてつくっている。道内ではつくられていない。どうして北海道は自分たちの「本場」でつくろうとしないのか。なぜ香川県なのか、誰もが不思議に思うに違いない。

北海道の人は「香川県でつくっている手袋だから、隙間から雪が入って困る」と言う。北海道の主婦たちは香川県の手袋を買ってきて、実際に使う前に、一度ミシンを入れて隙間をふさいでから子どもたちに渡している。こんなことがなんと十年もつづいている。それでも北海道で手袋をつくらうとしない。そして北海道経済は、カネが北海道から流出して本土にとられる構造になっていると言う。

こんな場合、たとえば大阪や神戸のオバサンだったらどうするか。百人のうちひとりくらいは、頭を働かしてその隙間だらけの手袋を買占めて改造し、さらにバラの花の刺繍なんかを入れ、「よし子の手袋」とかなんとか自分なりのネーミングをしてスーパーへ持っていこう。その改造手袋でひとつ五〇円稼げば、二十で千円の儲けだ。そういうオバサンから“札幌手袋”会社の社長が出てくるのである。あるいは、オバサンのアイデアをデパートの主任なんかさっそく盗用して大々的に売り出すことだってある。ところが、北海道にはこの十年間、たったひとつの手袋オバサンも出てこなかった。